農村アメニティ・コンクール
受賞地区およびその周辺（一例）

岩手県遠野市 遠野ふるさと村の集落風景 （第1回優秀賞）

秋田県象潟町（現にかほ市）田園と水辺風景 （第15回優良賞）

富山県砺波市 チューリップ畑と散居村の集落 （第4回優良賞）

富山県平村（現南砺市） 五箇山 相倉合掌集落 （第14回優秀賞）

山梨県早川町 身延山の講中宿が並ぶ赤沢集落 （第9回優秀賞）

京都府美山町（現南丹市） 茅葺き屋根の北山集落 （第3回優秀賞）

戸沼　私も昭和59年から平成15年くらいまで旧国土庁主催の地域づくり表彰審査のために47都道府県を歩いたのですが、その時つくづく感じたのは地元の人が地産地消運動などとても一生懸命やっている、とくに女性が、ですね。地域をつくっているのは地元の人だな、女性だなとの実感の連続ですよ。浜さんと同じように審査というより勉強させてもらったという印象が強いのですが、国土庁の仕事で一番面白かったですね。

浜　国土庁にあったそんなソフトな事業は、出会いの場でもありましたね。

戸沼　戦後、国がやってきた国土政策は地方と東京をどうやって均衡化するかだったと思います。列島改造を打ち出した時もあれば、地方に工業団地を根付かせようという時代もあり、あるいは定住という形で城下町の単位でまとまりをつけたらどうかなど、いろいろなレベルでやったけどなかなかうまくいかない。大都市圏への集中が戦後ずっと続いていたので、最後には首都機能を移転したらどうか、という議論になった、私の場合は東北遷都論ですが、１９７０年以降国土庁でも一生懸命議論した時期がありましたね。しかし、たえず国の考え方や政策と、実体として住んでいる人の考え方とにずれを抱えたまま国土政策を展開してきた一面があったという気がしています。

浜　私は全国を歩いてみて均衡化というのはありえないと思います。あの昭和30年代から40年代前半の列島改造論のころ、こんなことをしていたら日本の風土や歴史が全く奪い去られてしまう、と大へんな危機感を持ちました。均衡化、均一化していくというのは中央のおごりではないか、都会が元気だから日本全土が元気というわけではない、それぞれの風土がもつ歴史観とか生活スタイルといったものをなぜもっと大事にしないのかと不思議でならなかったのです。

野見山　たしかに国土面積の三割の三大都市圏に全人口の過半数が住んでいますし、なかでも東京の経済活動が日本経済を支えていたのも事実でしょうが、国は地方にミニ東京をつくり均一化すべきと考えていたわけではないのです。政策をすすめる過程で、結果的に地方の個性を活かしきれず、どうしても同じパターンになりがちだった、という批判は重いものと受け止めています。私どもＵＲ都市機構は、21世紀の現在、どうまちづくりを提案していけばいいのだろうか。戸沼先生は早稲田大学の最終講議で人間尺度のまちづくりを提言しておられますが。

戸沼　人間には寿命があり、老若男女、寿命を重ねつつ生きていますが、そこに”愛”、家族や人間同士をつなぐ”愛”の領域があります。地面に足をつけた太古の昔から営々とやってきた人間の営み方があります。私は生まれが青森の鯵ヶ沢、白神山地を流れる赤石川のほとり、三内丸山の縄文遺跡の近くです。そのみちの大家は、「あなたの顔は縄文人の顔ですね」と（笑）。生まれたところは、ブナ林はあるし鮎は泳いでいる、もう七十過ぎましたが、厳しいけれど四季のたっぷりある自然の中で育ったことで基礎体力がついたと思っています。その後函館に移りますが、ハイカラでロシアなどと国際的なつながりもあるまちです。先刻、函館の市長に函館学というコーナーを新設の図書館に設けてはと提案しました。高田屋嘉兵衛が雄大に北方漁業などで活躍した拠点ですし、昔からロシアともつながり、ウラジオストックとも姉妹都市です。大学は東京、早稲田に入りましたから新宿、青春の門ですよ（笑）。今、早大のオープンカレッジで新宿学というのを主宰していまして、江戸の新宿、戦後の新宿、現在の新宿、これをつくった人々の立場から人間尺度、等身大のスケールで過去・現在・未来を考える、これが面白い。東京というくくり方よりずっと小さな、新宿だけを見ても遠い歴史につながり、外国とも地球ともつながっていることを実感します。東京が、地方が、という議論もいいのですが、個性的な地域地域が不連続に国土や地球につながっているという見方もあるのではないでしょうか。かつて半年ぐらいずつアテネの近郊の村や、ロンドンのパディントンで暮らしましたが、どこの国でもコミュニティの楽しさがある所、人間尺度のスケールをもった地域があると思いました。その時、地域居住と地球居住の重なりを感じました。浜さんが、食という人間の生命や生活のもっとも基本のところで議論しようとされているのはすばらしいと思いますよ。

日本最大級の縄文期集落 三内丸山遺跡 大型建物の木柱跡 青森

重厚なレンガ造の旧ロシア領事館 函館

国の基本は農と食 役割が大きい女性

野見山　浜さんは日本のいまでいうスローフードの原点をつくられたのではないでしょうか。現在食育といわれていますけど、「食アメニティを考える会」を組織され、先駆けて活動されていますね。

浜　日本各地を歩いていますと桃源郷のように美しい集落があります。一般にはよく過疎という言葉を使いますが、私はこの言葉があまり好きではありません。生命には限界がありますから人口が減っていくのは事実です。しかしそういう集落で年輪を加えながらいきいきと生きている方がある以上、人口だけをとらえてそこを過疎だとはいえないと思うのですね。岩手の山根六郷は食の宝庫で、雑穀文化が残り、お年寄りが昔ながらの暮らしや手技を守って元気に暮らしている、それをサポートするのが近くの久慈市の人たちで、その交流によって人が集まってくる。そんな集落です。私は農村アメニティをお手伝いしながら農・食は命に直結していると心底感じとりました。しかしそれを支えている、身の丈にあった暮らしに寡黙にとり組み、大きな役割を果たしている女性達にはなかなか光があたらない、国が率先して表彰などの事業をやってほしいと「食アメニティ・コンテスト」（＊2）を始めていただきました。単に古いものがよいものだ、ではなく、日本の食文化としての郷土料理を守る、そして地域の食材をも守る、そうしなくては滅んでしまうのです。それからいまおっしゃった食育ですが、大事なのは都市と農村集落の交流です。いま国土交通省では対流という言い方をされていますが、後継者、担い手をつくる、それから女性の起業家グループもサポートする、これはすばらしいことなのよとわれわれが拍手して学ばせていただく、そういう思いで15年やって参りました。ヨーロッパのスローフードをみますと、私たち日本の暮らしにもあったわよ、スローライフ、これも日本にあったわよ、の連続です。それもこれも私たちの先人が築いてくださった美しい日本の暮らしなのに戦後取りこぼしてしまった、ものやお金に重きをおいてしまった、それで人がいま幸せを感じているのかというとそうではないと気づきはじめたのですね。私は仕事をしながら子どもを4人生んで育てましたが、もし来世は男性女性どっちがいいといわれたら、やはり女性と答えます。女性の社会は縦型社会ではなくて人の繋がりです。この指とまれで、子どももお年寄りもみんないっしょに幸せになる、それは命を育むという女性の仕事、役割だと思うのです。みんなで話しあって食アメニティというネットワークもつくりました。伝統食どうする、介護の問題どうする、全国の女性の方はみんな悲観論者じゃない、日本は大丈夫（笑）。これからは男女共同参画といった硬い言葉でなく、お互いの役割分担なのだと思います。

＊2 食アメニティ・コンテスト
農山漁村における生産や社会活動は女性の貢献が大きく、女性らしい感性や生活に根ざした活動をいっそう活発化するために、自主的に地域の特産物を活用し地域に貢献している優良事例を表彰し、農山漁村の振興を目的としている。
主催 農林水産省・（財）農村開発企画委員会
（平成3年度から国土庁が実施 平成13年度から農林水産省に移管）

戸沼　そもそもその土地での暮らしは、自然のリズムと合ったスローなものでしょう。勝ち負けの世界ではスピードが早い方が勝つ、遅くて勝つというのはゲームではまずない、いや自転車の遅乗り競争というのがあったかな（笑）。生活と市場経済原理とは対立しがちですが、「食」は人間を支えている安全や安心の根底的ディフェンスの領域ですから、緊急の対応を迫られる場合もありますね。人間同士のコミュニティの伝統的ルールが崩壊して、家族間や近隣間でディフェンスの基本領域が非常に不安定になってきていますね。そういう視点からも浜さんのおっしゃる食の楽しさと同時に、食の安全が第一でその見直しは大切です。日本には世界中から食物が来ますから、何が安全かラベルに表示されている情報を信用するしかない。産地の信頼できる人の情報がぜひ必要です。

浜　安全とはなんでしょうね。政策として海外から輸入せざるを得ない制約や条件があるとは思うのですが、自給率が40％という低さは先進国にはない、やはり私は国の根幹は農産業だと思っていますので、そこが元気でなければどんなに議論しようと、どんな理想を掲げようと国家としての安全はないと思っています。これからも人口が増えていく中国やイン